

したが敗戦の惨めさ、哀れさを後世に語り継ぐものがあります。

引揚げてからの生活も人生のやり直して、この血の出る労苦が待っていたことをつけ加えておきます。

女の私たちが監視哨に立ち

北海道 西田 紀久子

男子青年は兵隊へ、女子青年が後を引継ぎ監視哨勤務をすることになりました。

忘れもせぬ昭和二十年八月十六日、ソ連の飛行機が飛んできました。

上恵須取市街に爆弾が投下され燃えています、アツトという間に監視哨を低空で狙って来ます。

その時の立哨に立っていたのが得地さんでした。哨長は「立哨おりろ」と命令する、得地さんはおりて外へ出たとたん、機銃掃射でバラバラとそばまで弾がきました。幸に体にあたらずホットしました。

皆が防空壕の所へ集合全員山を下りるとのこと、いつもの道と反対に下り、川を渡って東の方へと歩き、夕方七時頃私の家の前を通りがかりましたので、哨長に「食事をしていきませんか」と言って家に入りました。

家には義兄と部落の人達五人おり、心強かったものです。食事を終え、夜九時頃出発しました。

三時間経った頃、私もうろうとしてねむけがして、皆と反対の方向へ歩き出すのを見て、「阿部さんどこへ行くのー」と誰かが大声で言ってくれ、ハット目がさめました。

夜が明け、ある人家で食事をご馳走になり、ひと眠りしました。

日中は機銃掃射をあびるので、三日間夜だけ歩きようやく内路駅から汽車で豊原の監視本部へ着き、全員直立して隊長から終戦のことを聞きました、何が何やらわからず、うつむいたまま、すすり泣き無言のひとときでした。

本部から宿を指示され、広い部屋に住むことになり

ました、その夜爆弾投下、三十分ぐらいで音がしなくなり、また、あとからの情報で、その時豊原にいた避難民が死亡とのことでした。

次の日又宿が変わり、寮に入って五日目の日、ソ連のキャプテンが見廻りにくるとのこと寮長さんが来て、私達の部屋の引き違いの戸に防空紙を張り、「静かにしていなさい」と言われました。物音を立てずじっとしていると、夜七時頃足音がします、部屋の前に来た時、「ここは誰もいない。」と隣の部屋へ廻って帰りました。あの時見つかったら、寮長さんも哨長も取調べられたことでしょう、寮長さんの気転と勇氣に感謝しました。

豊原に一月もいたでしょうか、ソ連の方から、皆自分の家へ帰るよう命令がでて、心配しないで帰ってアラボーチしなさいと、又二十三里の道を、歩いて日中でそれに飛行機も飛ばないし、安心して、あっちこっちから集まり歩き出しました。

所々に休んで食事を出してくれる所あり、ありがたく思いました。夜は空屋に泊り、四日間かかって我家

にたどり着いたのに、知らない家族が住んでいたもので、わけを話して出て行ってもらい、その人達がねこそぎ馬車で持つて行き、食べる物もなく、隣にいた姉達が早く帰っていたので、おにぎりとおかずを持つて来てくれ、ようやく寝ることができ、次の日はゆっくりと休み、朝みると、島の物は五町歩の島作が残っていたので、一年は生活できお米も配給になり、食べることに不自由はなかったです。

二十三年、家族五人引揚げになり、恵須取に出て二十日はど船待ちをし、真岡まで行き、真岡で半月ぐらい船のくるのを待ち、十八日に乗り込み、私が熱をだしてぐったりしましたが、ゆっくり寝ていたらなおり、十九日に函館に着き、DDTをかけられたおかげで、シラミが出なくなり、すばらしい薬があるものだと思議になりました。

二番目の兄が南方のスマトラから復員して、函館のおじの家にお世話になっていて、私達を迎えに来てくれ、一部屋を借りて一月いたでしょうか、お祭りが来て花電車を見てみると、長男の兄と小樽に

いた姉が迎えに来てくれました。

これで、おじの方のめいわくをかけずにすむと心がかかるようになりました。

兄は、島町試験所に勤め官舎がある、汽車で七時間かかり、官舎に着いたが、食べる物が無い、兄は所長にお願ひして、じゃがいもをもらつて来てくれ、しばらく振りで満腹感を感じました。

私と妹は兄と同じ試験所で働くことになり、給料でヤミ米の買出しに出かけたが、知らない人には売ってくれません。父が買つてきたので、お米の有難さを感じみじみと感じました。

兄が結婚し、父は役場の小使をすることで、一里離れた所で暮し、私も母の方から二十分かかるので、自転車を通ひ、食事を作ることはなくなったが、父が朝五時に起き、広い広い役場の掃除も大変で、土足の出入ですから、水をまいてはいいても、ホコリがまい上り、おさまってから机の上のおきそうじを私が手伝ひ、自転車で八時半までに試験所へぎりぎりでした。

三年して私も小樽へ来て結婚し、主人の兄弟六人も

おりますが、祖父を見る人がいません、私達が見ることにになり、二十五年一緒にいて九十歳で亡くなりました。

三人の子どもそれぞれ結婚し、今は夫と二人の生活でのんびりとテレビの情報を見、少しの島で野菜を作つたりして過ごしております。

引揚げてからの苦勞も大変でしたが今は幸せです。戦争はぜったいにしないで下さい。

毒草をポケットに入れて

北海道 白鳥ヨネ

終戦のあとの八月二十日の出来事、雨のしとくと降る朝、遠くで雷でも鳴るようなひびき、沖の方を眺めると砲声の音でした、ソ連の艦隊による砲撃でした。隣村よりの口伝えで避難するようにと、此処に住んでいた人達も、避難しなければなりませんでした。

多蘭泊の沢に避難する事となり、リュックに食糧品